

## しゃべらないドラマ教育

齋藤安以子 (摂南大学)

言語教育では、学習対象言語を語彙や文法、難易度、丁寧表現、聴解と読解、文体、ジャンル、といった視点から見る。その影響か、教員が演劇要素を授業に取り入れるときには、いかにして学習言語の音声表現を豊かにできるか、というスタンスで練習課題を設定したり、評価したりする。ドラマを使った授業案の多くは、クラスが全員参加できるよう多くの登場人物が少しずつセリフを言うように作られた脚本を提案する。セリフが少ない・ない役は、教材用脚本の中では、たいてい花形ではない。セリフを話していない場面での振る舞いの演出を細かく記した教材用脚本も少ない。言語教師は、ドラマ教育の中でも、書き表せる形の言語によってさまざまなミッションを行おうとする。しかし、俳優グループに教職課程の学生向けのワークショップをお願いしたところ、まったく異なるアプローチでドラマを使った授業となった。口から発する言語と言う意味では無言なのだけれども、あきらかに相手にメッセージを発し、受け取り、交渉し、即興で展開する、豊かなコミュニケーションが絶えない60分だったのだ。近々教育実習に向かう学生は、自分たちが正しい知識と十分な準備で優れた授業案を作る一方、教室では全身から生徒にメッセージを発することができる人にならなければならない、と学んだ。生徒の名前を呼んだら相手が答えるのではなく、全身で相手にはたらきかけるからこそ相手から反応を引き出せる。この点を学ぶアドバンテージは教職課程の学生だけではない。ことばを使う人は、しゃべらないコミュニケーションの術をドラマ教育で学ぶことで、学習言語をしゃべる際の効果をもあげることができる。発表では俳優と学生のワークショップの様子も紹介する。